

## &lt;前回・オリエンテーション+導入&gt;

\* 自然神学の社会科学への拡張

## 後期オリエンテーション

1. 自然神学とその歴史的展開
  - 1-1: 自然神学とは何か 10/13
  - 1-2: 自然神学とキリスト教思想（弁証と論争）の形成 10/20
  - 1-3: 自然神学と自然学・自然科学 10/27
  - 1-4: 自然神学の古典的な諸問題 11/10
  - 1-5: 自然神学の拡張と聖書 11/17
2. 自然神学の拡張と科学論
  - 2-1: 聖書の社会教説 11/27
  - 2-2: 聖書の経済・環境思想 12/1
  - 2-3: 聖書の政治思想 12/8
  - 2-4: 自然神学から社会科学へ 12/22
  - 2-5: キリスト教思想と科学技術 1/5
  - 2-6: キリスト教思想と生命 1/12
  - 2-7: キリスト教思想と脳科学 1/19

## フィードバック

<成績評価> レポートによる。（講義内容の理解と、それとの関連における問題の展開を問う。）レポート内容についての相談は、個別的に行う。

<導入> 自然神学を問うために

## 0. キリスト教研究＝キリスト教学という学問研究

歴史的な生きた宗教としてのキリスト教という問題

## (1) 「キリスト教と文化」という問い

## 1. キリスト教の多様性

## 3. 類型論:H・R・ニーバー

・「キリスト教と文化」の関係についての類型論（ヘルムート・R・ニーバー）

## 4. 理論的分析：意味論

・芦名定道「原子力とキリスト教思想——矢内原とティリッヒ」（キリスト教文化学会）  
「次に、ティリッヒの科学技術論を参照することによって、これまでの議論から得られた二つの論点、つまり科学技術の批判的監視と文明的視点とについて考察を進めることにしたいと思います。ここで参照されるティリッヒの科学技術論とは、彼が科学技術について直接に論究した文献ではなく、1920年代後半にプロテスタンティズム論として提出された議論を科学技術論として解釈したものです。<sup>(5)</sup> 注目したいのは、プロテスタント原理を構成する四つの契機の弁証法的連関です。

やや抽象的な議論になりますが、以上のように、「合理と超合理」と「批判と形成」の二つの軸によってプロテスタント原理は構造化され、ここから次の四つの契機が提示されることとなります。すなわち、合理的批判、合理的形成、超合理的批判、超合理的形成で

す。この四つの契機によって、キリスト教思想と科学技術との関係を描いて見ようというのが、わたくしのこれから話の要点になります。

以上がプロセス原理を構成する四つの契機の相互関係ですが、そのポイントは、四つの契機はそれぞればらばらに存在するのではなく、相互に関連づけられ、いわば弁証法的に統合されることによってはじめて、世俗的生と動的に結ばれた生きた宗教的生を成り立たせており、これによって宗教と文化のダイナミックな関連性が理解可能になるという点です。1920年代のティリッヒが構想した宗教社会主義は、まさにこうした弁証法的理論として提示されたのです。」

## (2) 宇宙論的宗教と別の可能性

### 5. 古代地中海世界とキリスト教

宇宙論タイプの宗教：

神(々)の存在領域としての「天」「星界」

天と地の照応性 → 占星術

### 6. 創造論と悪論という共通基盤

古典的な自然神学：自然学（自然科学）とキリスト教神学

「自然学／形而上学」という枠組み

### 7. 東アジアの宗教文化的伝統において、古典的な自然神学はキリスト教思想にとって有効であり得るか。

### 8. 別の可能性：「家族／国家」という共同性あるいは儒教的伝統

### 9. 方法論：自然神学の基礎に遡り、そこから議論を再構築すること。

芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。

・コミュニケーション合理性の探究としての自然神学

・自然神学の拡張という課題

↓

### 10. 現代の問題状況における検証

## 1. 自然神学とその歴史的展開

### 1 — 1 : 自然神学とは何か

<「宗教と科学」関係史と自然神学>

未分化／調和

／分離・分裂／対立／無関係／新たな関係へ

分化／区別（専門化）／緊張

古代

中世

近代初頭

啓蒙・19世紀

20世紀

創造論

二つの書物

知恵

自然神学

神の存在証明

天文学

生命

心・脳

進化

遺伝子

原子力

### (1) 辞書的な理解のレベルで（自然神学に関する一般的な定義）

#### 1. Natural Theology (*The Oxford Dictionary of the Christian Church*, 3rd. edition, p.1132r.)

The body of knowledge about God which may be obtained by human reason alone without the aid of Revelation and hence to be contrasted with 'Revealed Theology'. The distinction was

worked out in the Middle Ages at great length, and is based on such passages as Rom. I:18ff., acc. to which man is capable of arriving at certain religious truths by applying his natural powers of discursive thought. In a definition of the First Vatican Council (De fid. cath., cap.a, can.2) the possibility of this knowledge is explained by the dependence of the creature upon God. The chief objects of Natural Theology are God in so far as He is known through His works, the human soul, its freedom and immortality, and Natural Law. Hence, strictly speaking, Natural Theology is part of philosophy and treated as such in the systems of Scholasticism. Reformation theology generally rejected the competence of fallen human reason to engage in Natural Theology; and in modern times this incompetence has been reasserted with emphasis by K. Barth and the Dialectical School. Modern theologians sympathetic towards the ideals of Natural Theology often present their views under the heading of 'Philosophy of Religion'.

## 2. 「自然神学」(『宗教学事典』丸善出版、2010年10月)

自然神学は、キリスト教思想における伝統的なテーマであり、古代から現代にいたるまで多岐にわたる研究がなされてきた。まず、基本的なことから議論を始めることにしよう。神認識との関わりにおいて、自然神学は、通常啓示神学と対をなすものとして理解されてきた。つまり、啓示神学が、神の啓示の書物である「聖書」を通じた神認識であるのに対して、自然神学については神の被造物(作品)としての「自然」を通じた、あるいは人間の自然の理性的能力による神認識と一般的に説明されてきた。聖書と自然を神認識のための書物とする「二つの書物」説は、その典型であり、また宇宙論的神の存在論証(神の存在と属性を論理的に示す)は、自然神学の代表的な議論とされる。

こうした意味における自然神学については、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会との対立という歴史的状況を背景に、とくに、プロテスタント的立場のキリスト教思想家によって否定的な評価がなされてきた。聖書的啓示や聖霊の助けなしに神が認識可能であるというのは、異教的また異端的、非難すべき中世カトリック教会的な遺物であるとの見解である。たとえば、1930年代の有名なバルトとブルンナーの「自然神学論争」は、プロテスタントにおける反自然神学的立場を印象づけるものとなった。しかし、こうした状況は、最近の自然神学をめぐる研究の進展のなかで、大きく修正を迫られている(詳細は参考文献を参照いただきたい)。そこで、以下においては、自然神学の歴史的展開を概観した上で、キリスト教思想研究における自然神学の再評価の動向を紹介することにしたい。

### 〈自然神学の歴史・問題状況〉

自然神学の歴史は、古代イスラエル宗教思想(創造論から知恵思想へ)と古代ギリシャの哲学的神学との双方を前提とし、両者が古代キリスト教思想形成期に遭遇した時点でまで遡ることができる。たとえば、ローマの信徒への手紙1章18節～23節におけるパウロの思想は、キリスト教自然神学の発端をして位置付けられるが、自然神学の成立が学としてのキリスト教神学自体の不可欠の構成要素あった点に注目しなければならない。4世紀のカップドキアの三教父において確認できるように、キリスト教神学は異教文化に対するキリスト教の弁証とキリスト教内部における異端との対決という役割を果たすなかで展開されたが、この弁証と論争とを支えていたのが、自然神学(弁証や論争の相手と共有され

た共通前提としての自然的な理性能力) だったのである。

こうした自然神学の伝統は、中世神学から近代神学への展開される。中世における自然神学の代表とも言えるのが、トマス・アクィナスが『神学大全』で提示した「五つの道」の議論である——こうした中世神学における自然神学の展開が後に自然神学はカトリック的との誤解を生じた——。これは、宇宙論的な神の存在論証の模範的な議論であるが、トマスの神の存在論証は、自然学的知（運動や因果律などについての知識）とキリスト教神学的知（啓示神学）とを論理的に媒介することによって、キリスト教的な統一的な知の世界の構築（スコラ的文化総合）に基礎を与えたものと言える。最近のキリスト教思想研究が明らかにしたように、中世の自然神学は近代のプロテスタント的なキリスト教思想（とくにカルヴィニズムからピューリタンへ）へと受け継がれ、ニュートンとニュートンの弟子たちによるニュートン主義の自然神学（デザイン神学。世界・宇宙に見いだされた見事な秩序・法則性＝デザインからデザイナーとしての神を推論する）を生み出すことになった。このニュートン主義の自然神学は 19 世紀半ばの進化論の登場まで（あるいはそれ以降も）、大きな影響力を保持し続けたのである。

その後、先に指摘した、現代プロテスタント神学における自然神学批判（バルトとブルンナーの自然神学論争）の影響で、自然神学への関心は急速の後退することになるが、キリスト教的知の再構築の必要性が意識される中で、近年多くのキリスト教思想家（参考文献を参照）が自然神学に関わる問題領域において様々な試みを行ってきている。

〈自然神学の新しい可能性〉

以下、最近のキリスト教思想における自然神学への取り組みから明らかになってきたことについて紹介することにしよう。まず、確認すべきは、自然神学には広義の自然神学と狭義の自然神学との区別の必要であることである。自然神学は宇宙論的な神の存在論証のように、自然を通した神認識であると理解されてきた。たしかに、自然を通した神の認識は、伝統的な自然神学で大きな部分を占めてはいるが、しかし、これはいわば狭義の自然神学というべきものであって、本来キリスト教自然神学はより広義な解釈を可能にするものだったのである。前述のように、自然神学は異教文化への弁証や異端との論争といった、立場を異にする他の思想との対論・対話の前提として存在していたのである。これは、人間としての自然本性を共有する諸思想が共有する理性能力と言うべきものであって、自然神学の「自然」とはこの「自然本性」という意味で広義に理解する可能性を有していたのである。自然を通しての神認識は、この広義の自然神学が、古代イスラエルの宗教思想と古代ギリシャ思想とが自然学的知（創造と知恵）共有していたことに基づいて歴史的に形成された特殊な仕方での自然神学だったのである。

近年探究されつつある自然神学の新しい可能性は、自然神学の本来の意図・射程を現代の思想状況で追求する試みなのである。それは、キリスト教神学と現代の諸科学・諸思想との対話可能性の具体的実現としての自然神学であり、キリスト教思想をコミュニケーション合理性の上に形成する作業にはかならない。これは、キリスト教思想のみの問題ではなく、他の思想との対話をめざすすべての宗教思想が共有する問題と言える。つまり、仏教的自然神学や神道的自然神学とでも言いうる思想形成が、自然神学で問われているのである。ここで、自然神学の問題は、公共性の問いと結びつくことになる。

[芦名定道]

## 【参考文献】（省略）

## 3. 宗教哲学・哲学において

Anthony Kerry, *What is Faith ? Essays in the Philosophy of Religion*,

Oxford University Press, 1992.

Natural Theology, it is sometimes said, is neither natural nor theology. It is not theology, but philosophy, it is the philosophical study of questions concerning the existence and nature of God. It is not natural, but highly artificial: it is a discipline which came into existence only after both philosophy and theology had reached a mature stage of their development.

Some philosophers deny that there can be any such thing as natural theology, because, in their view, all talk of God is an idle use of senseless language. But if that is true, it takes philosophical argument to show it; and that argument will itself be, in a broad sense, a form of natural theology. (63)

↓

・キリスト教自然神学：源泉？ 内実？ 可能性？

## 4. 聖書的前提：創造論／知恵思想

→ なぜ世界は合理的なのか、なぜ合理的探求が可能なのか  
合理性の根拠、単一性（斉一性）

「8:2 主よ、わたしたちの主よ／あなたの御名は、いかに力強く／全地に満ちていること  
でしょう。天に輝くあなたの威光をたたえます

3 幼子、乳飲み子の口によって。あなたは刃向かう者に向かって砦を築き／報復する敵  
を絶ち滅ぼされます。

4 あなたの天を、あなたの指の業を／わたしは仰ぎます。月も、星も、あなたが配置な  
さったもの。

5 そのあなたが御心に留めてくださるとは／人間は何ものなのでしょう。人の子は何も  
のなのでしょう／あなたが顧みてくださるとは。

6 神に僅かに劣るものとして人を造り／なお、栄光と威光を冠としていただかせ 7 御  
手によって造られたものをすべて治めるように／その足もとに置かれました。

8 羊も牛も、野の獣も 9 空の鳥、海の魚、海路を渡るものも。

10 主よ、わたしたちの主よ／あなたの御名は、いかに力強く／全地に満ちていること  
でしょう。」（詩編）

## 5. パウロ：Rom 1:19-20

διότι τὸ γνωστὸν τοῦ θεοῦ φανερόν ἐστιν ἐν αὐτοῖς ὁ θεὸς γὰρ αὐτοῖς  
ἐφάνερωσεν.

τὰ γὰρ ἀόρατα αὐτοῦ ἀπὸ κτίσεως κόσμου τοῖς ποιήμασιν νοούμενα  
καθοράται, ἢ τε αἰδίδιος αὐτοῦ δύναμις καὶ θειότης, εἰς τὸ εἶναι αὐτοῦς

## ἀναπολόγητους,

(ローマの信徒への手紙)

1:18 不義によって真理の働きを妨げる人間のあらゆる不信心と不義に対して、神は天から怒りを現されます。19 なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らにも明らかだからです。神がそれを示されたのです。20 世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。従って、彼らには弁解の余地がありません。21 なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。22 自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、23 滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです。)

### (2) キリスト教神学の自然神学の源泉

6. 自然神学は古代ギリシャ哲学起源である → キリスト教・教父

- ・自然神学とは本来哲学の一部門である。
- ・神学自体がギリシャ起源であり、キリスト教化されることで、キリスト教神学となった。

Ingolf U. Dalferth, *Theology and Philosophy*, Wipf and Srock Publishers, 2001.

パネンベルク『学問論と神学』教文館。

「序論 学問論と神学」の「第二節 神学の学問性要求の起源」

7. プラトンの自然神学 (『法律』第10巻、『プラトン全集 13』岩波書店)

「法律の命ずるとおりに神々の存在を信ずる者で、自らすすんで不敬なことを行なったり、また不法な言葉を口にしたりした者は、かつて誰ひとりいないのである。もし誰かそういうことをする者がいるとすれば、それは彼が、次に三つの誤った考え方のうちそれか一つにおちいつているからである」(885B)

「神々を存在しないと考えていないか」「神々は存在するけれども、人間のことを気づかなくてはくれないと考えているか」「神々は犠牲や祈願によって心を動かされるから、機嫌をとしやすいものであると考えているか」

「あのような[無神論の]説が、人類全体と言ってもいいほどに広がっているのではなかったなら、神々の存在を擁護するための議論は一つも必要なかったでしょうからね」(891B)

「自分自身で動かす動は、すべての運動変化の始原として、静止しているもののなかにおいて最初に生じてくるものであり、運動変化しているもののなかでは第一番目のものであるから、その動こそが必然的に、あらゆる運動変化のなかでは最も古くて最も強力なものである、ということになるでしょう」(895B)

「「魂」という名前をもつもの、その定義」「自分で自分を動かすことのできる動」(895D)、「魂がすべてのものにとって、あらゆる変化や運動の原因であること」(896B)

「動いているものにはすべて魂が宿っていて、これを統轄しているのだとすると、魂は天をも統轄していると言わざるをえないではありませんか」(896E)、「もし天と天のなか

S. Ashina

存在するすべてのものとの軌道や運行全体が「知性」の運動や回転や計算と同様な性質のものであって、それに類似した仕かたで行なわれているのであれば、その場合には明らかに、最善の魂が宇宙全体を配慮していて、そしていま言われたような[知性が運動するのと同様な]軌道にそって、宇宙全体を導いているのだと言わなければなりません」(897C)

「それらはあらゆる徳をそなえた善い魂なのであるから、これらの魂は神であると、わたしたちは言うことになるでしょう」(899B)

「神々について君のような考え方をしている者は、君一人だけではないし、また君の友人たちが最初で初めの人というわけでもない。いな、そのような病気にとりつかれている者は、多い少ないはあれ、いつの時代にも現われてくるものだ」(887B)

「その連中がまず最初に主張していることは、神々は人為（技術）によって、つまり自然によってではなく、一種の法律（慣習）によって存在しているのだということです」(889E)

#### 8. ログス論：ヘラクレイトス、ストア、フィロン

・波多野精一『西洋宗教思想史（希臘の巻）』（『波多野精一全集 第三巻』）

・ストア哲学、アレクサンドリアのフィロン

平石善司『フィロン研究』創文社、1991年。

「第一部 フィロンのログス論」

フィロン『世界の創造』（町田啓、田子多津子訳）教文館、2007年。

・アウグスティヌス『神の国』第4巻第27章

「もっとも学識すぐれた祭司長スカエウォラは三種の神々を区別してと、書に書かれているが、その第一は詩人によるものであり、第二は哲学者によるものであり、第三は国家の指導者によるものである。それによれば、第一のものは、神々にふさわしくない多くのつくりごとを含んでいるからとるにたらず、第二のものは、余分なものや、それを知ることが人民に有害であるものをももっているから国家にはあわない。」（服部英次郎訳・岩波文庫『神の国（一）』329頁）

矢内原忠雄『アウグスティヌス 神の国』（土曜学校講義2）みすず書房、141頁。

・David C. Lindberg, "The Medieval Churches Encounters the Classical Tradition: Saint Augustine, Roger Bacon, and the Handmaiden Metaphor," in: David C. Lindberg and Ronald L. Numbers, *When Science & Christianity Meet*, The University of Chicago Press, 2003.

The church father who has come to symbolize this fear was Tertullian, a highly educated critic of the classical tradition, who converted to Christianity after completion of this own superb classical education. Tertullian wrote extensively against heresy, attacking the classical tradition as its incubator. (11)

The church father who most influentially defined the proper attitude of medieval Christians toward pagan learning was Augustine. (12)

(→ H・R・ニーバーの類型論)

#### 8. 田川建三『キリスト教思想への招待』勁草書房、2004年。

「第一章 人間は被造物」

「二世紀から三世紀の移り目ごろの創造信仰を表現したものとして、最も有名なものの一つがミヌキウス・フェリクスの『オクタヴィウス』」*「Minucius Felix, Octavius, XVII.5-11」*

「テルトゥリアヌスと並んで、いわゆるラテン語護教家の代表的人物の一人」

「著者の直接の意図は、神の存在を論証するところにある。」

「自然の恵みをなるべき自然なままに感謝していただく、という伝統が生きている。創造神学がつけ加った伝統である。」

「パウロ自身もまた、はっきり自然神学的説教をくり返していたのは、あまりに明白である。」*「自然神学は、パウロ書簡を中心にして考えるよりは、ずっとはるかに、初期のキリスト教全体を貫いていたはずである。」*

「キリスト教の創造信仰は、一方では明瞭に、ユダヤ教正典たる旧約聖書の創造信仰の継承である。他方では、しかし、ストア派の汎神論的な創造信仰が、天文学の教科書を通じてギリシャ語のユダヤ教に継承され、それが更に最初期のギリシャ語ユダヤ人キリスト教に継承されたのである。要するに、キリスト教の創造信仰は、それ以前の人々がいろいろ集めてくっつけて貰い受けたものである。」

A・A・ロング『ヘレニズム哲学 ストア派、エピクロス派、懐疑派』  
京都大学学術出版会。

9. キリスト教・キリスト教思想は、二つの源泉の相互関係において理解する必要がある。

この相互関係の文脈が、古代地中海世界であり、宇宙論的タイプの宗教の伝統が普及している地域であったことの意義。→ 現代までの規定要因の一つ。

- ・自然神学は宗教に関わる哲学的思惟に属する。
- ・キリスト教神学は、神学の学的基盤をめぐる議論を介してキリスト教神学と緊密な連関を有する。

#### <参考文献>

1. 芦名定道『自然神学再考——近代世界とキリスト教』晃洋書房、2007年。
2. A.E. マクグラス『科学と宗教』教文館、2003年。  
『「自然」を神学する——キリスト教自然神学の新展開』教文館、2011年。
3. 芦名定道「自然神学」(『宗教学事典』丸善出版、2010年10月)。
4. A・S・マクグレイド編『中世の哲学 ケンブリッジ・コンパニオン』  
京都大学学術出版会、2012年。
5. E・グラント『中世における科学の基礎づけ——その宗教的、制度的、知的背景』  
知泉書館、2007年。
6. エティエンヌ・ジルソン、フィロテウス・ベナー  
『アウグスティヌスとトマス・アキナス』みすず書房、1981年。
7. Russell Re Manning (ed.), *The Oxford Handbook of Natural Theology*,  
Oxford University Press, 2013.

What is natural Theology? There is no easy answer to this question;

The lack of a fixed consensus on the definition of natural theology is due, in part, to its inherently interdisciplinary character and the inevitable limitations on definitions ... (1)